

第10回八尾市立病院経営計画評価委員会(議事概要)

<1> 日 時:平成28年8月2日(火) 午後2時～午後3時15分

<2> 場 所:八尾市立病院 北館5階会議室

<3> 出席者

委員長	植田 武彦	(病院事業管理者)
副委員長	星田 四朗	(病院長)
委員	貴島 秀樹	(八尾市医師会副会長)
	谷田 一久	(株式会社ホスピタルマネジメント研究所代表取締役)
	津田 慶子	(元八尾市職員)
	田中 一郎	(副院長 兼 診療局長)
	福井 弘幸	(副院長)
	森明 富美子	(看護部長)
	植野 茂明	(事務局長)
	門井 洋二	(八尾医療 PFI 株式会社ゼネラルマネージャー)

<4> 次第

1. 開会
2. 平成27年度の業務状況、並びに八尾市立病院経営計画の実施状況について
3. その他
4. 閉会

[資料]

(1)八尾市立病院の業務状況(平成27年度) …… 資料1

(2)八尾市立病院経営計画の実施状況(平成27年度) …… 資料2

<5> 質疑応答・意見交換

(委員)収益部会の担当の中で「1. 公立病院としての役割を果たす取り組み」(1)(2)の紹介率・逆紹介率について、特に逆紹介率については昨年の秋ぐらいまでは目標である70%の達成には非常に厳しい状況であった。しかし、そこから診療情報提供数を増やす取り組みを進めた結果、74%となり目標を達成することができた。平成28年度に入っても引き続き取り組みを進めており、今年度の目標においては達成できるものと安心している。

(3)救急患者の受け入れについては、昨年度のC評価からA評価にすることができた。要因としては、ICUを1床増床したことで、ICU満床のため救急患者を受け入れることができないという件数が減ったこと、若手医師を中心に救急対策チームを設置し、断らない救

急をめざし取り組みを進めた結果、救急患者の断り率が減少した。医師の意識が変わってきたので、いい傾向だと感じている。

次に、「2. 医療の質の向上に対する取り組み」の(1)がん診療の充実については、腫瘍内科医の退職による患者数と収益の減少が心配されたが、他の診療科でこれをカバーし影響を最小限に抑えることができ、また外来化学療法件数においては若干増加させることができた。

「3. 健全経営の確保に対する取り組み」の(4)医業収益の確保について、レセプト平均査定率で目標未達成となった。1件で高額になる検査や薬品が増えたことに伴い査定額も上がったと考えている。医師みずから異議申請に出向くなど査定を減らす取り組みは継続して行っており、平成 28 年度は目標を達成できるように頑張りたい。

(委員)費用部会の取り組みのうち、「1. 公立病院としての役割を果たす取り組み」の(7)市災害医療センターの機能強化について、北館の増築が完成し災害備蓄備品の整備を順次進めるなど機能充実に努めた。

次に、「2. 医療の質の向上に対する取り組み」の(2)チーム医療の強化については、現在 9 チームが院内を中心に活動を行っているが、緩和ケアチームや院内感染対策チームは、院内だけでなく院外にも活動範囲を広げ活動を行った。

「3. 健全経営の確保に対する取り組み」の(1)医療スタッフの確保について、医師確保については各大学医局への訪問活動を継続しており、平成 28 年 4 月 1 日現在の医師数は目標を達成することができた。しかし内科系では医師の充実が必要だと感じており、今後も精力的に取り組んでいきたい。また、医師事務作業補助者をさらに増加させることで医師の負担を軽減していきたいと考えている。

給与費の割合の抑制については、医業収益が増加したため、医業収益における給与費比率としては減少したが、給与費は昨年度から増加しており今後注視していく必要がある。

(5)診療材料費の適正管理について、高度医療を進めるとどうしても材料費が増加してしまうという現状がある。平成 26 年度、平成 27 年度とも目標未達成となった。今後も高度医療を進めていくなかで、医療材料の数量管理をしっかりと行い、また SPC による共同購入を進めることで費用を抑える取り組みを行っていきたい。

(9)その他の経費については、北館増築により光熱水費が増加すると見込んだが、使用量削減の取り組みもあり対前年度で使用量が減少した。

(委員)5 年連続の黒字決算となり、また資金剰余額も 30 億円を超え病院経営に余裕が出てきたことは良かったと思う。一般の病院は厳しい経営が続いているが、市立病院は減価償却費も全て含めて黒字を計上できている。

しかし、平成 27 年度に施設の整備や高額な医療機器の更新が行われたので、今後は減価償却費が増える。また、今年の診療報酬は実質マイナス改定となり、さらに消費税増税を考えると今後は経営が苦しくなっていくと思うが頑張ってもらいたい。

腫瘍内科の医師について、今後補充されるのか。

(副委員長) 大学医局に引き続き働きかけを継続しているが、大変厳しい状況である。

(委員) 腫瘍内科の患者数減は他の診療科でカバーし、クリティカルパスの件数も増加しているのでこれを維持されたい。また、眼科医が退職したと聞いたが補充はできたのか。

(副委員長) 眼科医の退職は平成 27 年度末なので、平成 28 年度に眼科の常勤医は不在となっている。大学医局へは働きかけているが、腫瘍内科と同様に状況は厳しい。

(委員) 資料では、平成 27 年度の放射線科の延入院患者が 36 人とあるが、放射線科の病床数と入院患者について説明されたい。

(副委員長) 放射線科の患者専用の病床は確保していないため空床のある病棟に入院いただいている。放射線科では平成 28 年 3 月に新たな放射線治療機器を稼働させたため 3 月に入院があり、延べ人数で 36 人となった。

(委員) 産婦人科について、昨年と比べて分娩件数が 18 件、子宮がん検診が 35 件減少している。産婦人科医を増やし分娩数と子宮がん検診の件数を増やしてもらいたい。

(副委員長) 子宮がん検診ができるクリニック等は市内に多数あるため、当院としては検診数を増やすのではなく、周産期と婦人科関係の手術等の医療を充実させたいと考えている。また、分娩件数については大学との協議で一定の枠があるがそれを超えて頑張ってもらっている。しかし、分娩予約をしたすべての方が出産するわけではなく、結果的に分娩数が若干減少した。平成 28 年度においては、分娩予約枠を少し拡大したため、分娩件数は増加すると考えている。

(委員) 資料から、経営が順調に良化していることがうかがえ、職員みんなで健全経営に取り組まれた結果、職員一人当たりの患者数や診療収入が府内平均を上回り、安心して良質な医療の提供により患者数が増え利益が出たことが分かる。

紹介率・逆紹介率については、年々数値が上昇し、また紹介元の医療機関も八尾市内の割合が増えており、病院がめざしている地域完結型医療に向けた努力の成果と考

える。市民が高度医療とかかりつけ医での日々の医療を住み慣れた地域で切れ目なく安心して受けられるよう引き続き頑張ってもらいたい。

次に、材料費が年々伸びているが、平成 27 年度は対前年度 12.9%の大きな伸びとなり、これに伴って医業収益に対する割合も平成 27 年度は対前年度で約 2 ポイント上昇している。今後も高度医療に伴う材料費の増加が病院経営に影響すると思われるので、不断の努力を続けて欲しい。

次に、分娩数については、経営計画では毎年度 6 人ずつ増加させる計画になっているが、平成 25 年度以降分娩数は前の年度より減少している。産婦人科医の確保は非常に難しい問題と理解はしているが、市立病院として市民が安心して分娩できる体制を整えて欲しい。

次に、医師の確保について、腫瘍内科医の退職により腫瘍内科の入院外来収入がゼロとなった。他の診療科でカバーしたとはいえ、一つの診療科でゼロとなる影響は大きい。難しいことは承知しているが医師の確保に努められたい。また、優秀な医療スタッフが八尾市立病院で長く働き続けることができるよう、働きやすい職場環境や職員の処遇について検討をお願いする。

また、平成 27 年度に創設されたベストホスピタリティー賞について、表彰の基準が患者からの投書やお礼の手紙の数とのことだが、感謝をしても声にしらない患者もあり、こうした表彰基準は職員の士気にとってプラスになるのか疑問を感じる。

(委員)今年度は分娩の予約枠を増やしている。予約をしても分娩に至らないケースもあり、分娩件数はひと月あたり 65 件ほどだったが、今年の 7 月は大幅に増えている。安全に分娩に至ることができるよう助産師による取り組みを充実させたい。

(副委員長)診療材料について、2~3 年前には想像もできなかったほどに抗がん剤の費用が増えており厚労省も対策を考えだしている。がん治療に注力している病院において材料費が増加することは残念だが避けられないと考える。効果のある薬は高いが収益もあるため、廃棄が出ないように有効に使うとともに、少しでも費用を安くする努力を続けていきたい。

(委員)材料費が増加していること自体が問題ではないと考える。よく効く薬は高いが、その費用は収益と結びついており診療報酬に反映されているものである。そのため材料費における課題は、数量の管理ということであり、不必要な使用や廃棄をどのようにコントロールするかということである。

経営計画の取り組みでも価格を下げるのが議論されているが、医療の質を維持しながら数量をどうコントロールするかが重要である。使用した分だけ材料費を払う仕組みを

取り入れている病院があるが、リスクを業者に移転しているだけで、それにより逆に値引きが進まないことになる。材料の廃棄等のリスク負担をどうするかという経営問題として議論を進めていくことが次のステップであると思う。

(副委員長)材料の廃棄に関しては、緊急手術用に確保する血液、患者のために準備したが使用できなかった薬剤などがあるが、医療安全に配慮しながら少しでも減らすよう取り組んでおり、平成 27 年度は輸血関連の廃棄が減少するなど成果が表れている。

(委員)感染性廃棄物について病院でも関心を持っていただけたらと思う。多くの病院でリスクマネジメントやICT(感染管理チーム)の取り組みをしているが、院内での取り組みにとどまっている。感染性廃棄物の処分を外部の業者に任せるだけでいいのか考えていく必要がある。

(委員)他の公立病院の評価委員も務めているが、八尾市立病院は 5 年連続の黒字計上も素晴らしいが、それを含め色々な意味で一番良いと思っている。ただ最近公立病院が元気づげて民間病院を圧迫しているという話をいろんな地域で聞くことがあるので、次のステップとして、周囲を見渡し必要以上に頑張っているところがないか考えてみてはどうか。

「市民に誇れる公立病院として、品格ある病院運営を実践します」という基本理念がとても気に入っている。品格を謳っている病院は八尾市立病院しかない。品格とは他者のことを思いやり、自院の利益より全体最適を考える気持ちを持っていること、ぶれない基軸を持っていることであると考え。利益を上げることのみでなく公の機関らしい病院経営を行うことが品格という言葉に入っているのではないかと思う。

5 年間黒字が続いたので、次は基本理念の実現に向け少し高い視点で全体を見て、自院の経営改善だけでなく全体を見渡した計画を持ってみてはどうかと思う。

(副委員長)腫瘍内科医が退職したことにより、平成 27 年度のがん診療について非常に心配していたが、化学療法を継続させ何とかすべてのがん患者の治療ができた。地域がん診療連携拠点病院である本院としては、すべてのがん患者を地域の中で治療できるということも品格ある運営ではないかと考えている。

(委員長)八尾市だけでなく、地域全体を見渡した市立病院の立ち位置が今後問われてくるのではないかと感じる。平成 30 年度に八尾市は中核市に移行し、保健所の機能が市に移譲される。公立病院を抱える中核市として、公立病院としてどういった役割があるか市の中で検討されている。公立病院として市民の命と健康を守るだけにとどまらず、中核市の公立病院として何ができるのかということも問われてくると考える。

平成 27 年度は、国による「地域がん診療連携拠点病院」の指定を受け、がん診療をはじめ医療機能をさらに高めることによって健全経営を維持することができた。しかし、今後病院の機能分化の方向は益々強まってくるものと考えられ、また、大阪府が本年 3 月に策定した「大阪府地域医療構想」によって、当院が今後どのような影響を受けるのか予断を許さないところではあるが、これまでの取り組みをしっかりと引き継ぎ着実な病院運営を進めてまいりたい。皆様には是非とも引き続きのご協力をいただきたい。

(副委員長)平成 27 年 4 月に新たに策定した当院の基本理念は、先ほどから話に上がっている「品格ある病院」のほか、「高度で良質な医療の提供」、「地域医療の推進」を掲げている。この基本理念のもと、少しでも良い病院にするために職員が一丸となって取り組みを進めてきたところである。品格ある運営に関しては、まだまだできていないことも多いと思う。本日いただいたご意見をもとに、よりよい公立病院をめざして頑張っていきたい。

(議事終了)